

パラワン島調査計画書

Yokohama

City Univ.

Palawan Expedition

1965

横浜市立大学探検部
パラワン島調査隊

序

わが部では、現在まで国内について種々の地域の調査を行ってまいりましたが、本年からは並行して海外においても調査を行うことになりました。そのはじめの計画として、特に日本と関係の深く、比較的未調査の地域の多い東南アジア諸島について長期的な調査を行うことになりました。ここはフィリピンからインドネシアにまたがる大島群で、現在まで多くの調査が行なわれてきたところであります。我々は現在までの経験や、舟の立場を考えた上でこの島群に関する研究を進めていきたいと思っております。

今回はその第一回の調査隊といたしまして、フィリピン西部、ホルネオに近いパラワン島について調査を行うことに決まりました。この島は、フィリピンに属してはいるが距離や、気候、地形などの関係から、開発が遅れ、フィリピン国内でも、むしろ外国扱いされたような地域です。そのためあって島内には未開民族が比較的純粋な形で残り、また水銀、マンガンなどの鉱物資源、豊富な木材資源も開発の歴史は浅くまた多くの地域が未開発のまま残されています。また生物分布上では、フィリピンよりも、むしろホルネオに近く、ウォーレス線の修正線がミンドロ海峡を通過しているルソン島とパラワン島の生物との相違を示しています。

われわれは、パラワン島の中心地フェルトフリニセサにて種々の島の状況を知り、後、焼畑農業あるいはそれ以前の原始狩猟生活を行うバタク族の部落に入って生活を共にすることによって未開民族の実情を知ると同時に、附近の生物調査を行う予定です。またフィリピンの他の地域にも短時滞在し、そことの比較によってパラワン島の現状を把握しようと思っております。

また今回の結果によっては、第二回の調査隊を、より学術的規模を大きくして、後日派遣する予定です。

本調査隊は、学生が主体であります。成果を期すため調査前後の後指導を諸先生からいただき学術意欲にもえて本調査目的を果したいと思っております。

パラワン島の生物

パラワン島は一年中、26°C前後の地域で、雨量もフィリッピン群島中では多い方ではないが、フェルトプリンセサを中心とした東海岸と、北部の一部を除いては、山の頂上まで森林が繁茂している。特に雨期は相当多湿になる。フィリッピン全体で見ると、哺乳類は、200種以上、鳥類は、760種以上、爬虫類、昆虫においても種類は、豊富である。しかし、ソウサイトラ等の大型の動物は(牛を除いて)なく、翼手目、齧歯目、食虫目が、哺乳類の大部分を示める。又植物は約一万種以上のぼる種類がある。

パラワン島には、マメシカ的一种(*Tragulus nigricanus*)センザンコウの一种(*Manis javanica*)樹仙の3種(*Tupaia rayonis*, *T. palawanensis*, *T. moellendorffi*.) *Mydaus*, *Aonyx*, *Actitis*, *Mungos*, 等諸属の食肉類、等ボルネオの生物と共通又は近縁の種類が多く、他の島に見られない動植物が多い。生物はフィリッピンよりボルネオに近いとされている。

目的

生物班は、民族班と共にバブヤン川を逆の(等)、バタク族の部落に住みこんで、部落を中心に、その周辺の生物、特に鱗翅目、鞘翅目、齧歯目の採集を行い持ち返って分類しこの地域の生物の資料とすると共に、実際に自分達の手で自然に触れて勉強し、次の段階への基礎としたい。

パラワン島の民族

パラワン島はフィリピンでも最も未開な地域である。これは、ルソン・ミンダナオ島を中心とするフィリピン群島とミンドロ海峽を隔てられているためでもあり、マラリヤなどの疫病の多いことや、モロ賊の海賊が出没することなどから、文化の高い民族があまり移住しなかったためである。それゆえこの島にはフィリピンの原住民であるネグリの一種、バタフ族がかなり純粋な形で残存している。また原始マレー族のタグバヌア族も、現在焼畑農業を営んでいる。南部にはモロ族の一種、パラワン族が住み、北部およびフェルトスリンセサ附近にはビサヤ族が居住している。調査は、フィリピンに現存する人類で最も原始的といわれるネグリの、バタフ族について行う。バタフ族について調査した人は、日本では戦前に三吉剛十氏があるのみで、外国やフィリピン本国においても非常に少ない。本族は1942年の人口が675人で、平均身長150cmという矮人である。一部の者は農業を知らず、多くは草本の根や魚貝の採集生活を営んでいる。フィリピンのネグリティ族は、マレー半島のサカイ族、アンタマン諸島のアンタマン族と近い関係にあり、インドネシア人、マレー人が渡島する以前に東南アジア諸島一帯に居住していたといわれる。高等種族の来島後は、山中が孤島に残り、次第にその数が減りつつある。フィリピンではルソン島の山中に7ヶ所、ミンダナオ島に1ヶ所、パラワン島、ビサヤ諸島にわずかに(1942年現在)残存するだけで、フィリピンで最も西部であるパラワン島のバタフ族は、マレー半島や、アンタマン諸島に近いだけに、それらの関係などについても興味深い。

われわれはフェルトスリンセサから北部山中に最も完全な形で残るバタフ族の部落を探し定住し、共同生活を営む。定住期間は20日程度の予定で、その間に、各種民俗調査を行う。特に狩猟漁獲の手段、食物衣服、部落形態、社会組織、通婚儀礼、芸術、できれば伝説についても調査を行う予定である。

パラワン島の経済

パラワン島の経済生活は、フィリピンにあっては特に原始的であり、狩猟、漁撈の蒐集経済と焼畑農業である。ネグリトのバタックは山岳地帯で蒐集生活を営み、タグバヌア族は、蒐集生活に加え、より進んだ段階の焼畑農業を営んでいる。そこで、地理学的調査としては、経済生活を中心とする。彼等は如何に、*national environment* に反応し、それを克服してゐるか、その実態を調べると共に、如何なる原因で、何が必要で、焼畑という農業形態を行うようになったかを主眼点として見たい。その裏、バタック族の部落に入り、焼畑農業以前の経済生活を調べることは、大いに参考になると思う。そして新しい文明の浸透によって、経済的に彼らに与える影響はどんなものか確かめたい。又、貨幣の有無を見ることも興味がある。

パラワン島概要

面積1.1万 km^2 、北緯 8° から 11° 、東経 117° から 120° 、東北から西南に長く、長さ450km、幅は5~40km、人口5万人(1948年)、人口密度 $4/\text{km}^2$ である。パラワン州に属し、州都はパラワン島の中心部にあるアエルトプリセサ(人口3万)である。交通は、マニラより飛行機(3時間、1日1回)、船(3日間、週2.3回)があり、アエルトプリセサ以外に都市らしいところはなく、北部にバキット、タイタイ、南部にアボラン、ブルクスポイントなど人口数千の町があるため、木材の開発が行われ、西南海岸では、フィリピンのAginardo社が伐採を行い、三菱商事が、丸太のみを日本に運んでいる。また、Roxasには珪砂、Tagburosには、水金昆などの鉱山もある。気候は熱帯モンスーン帯に属し、東部は雨量が比較的少ないが、西部は6~9月が雨季、11~4月が乾季である。定住する日本人は皆無で、第二次大戦中も、一箇大隊が、数ヶ月駐屯した後、Lyte島へ全量移ったとのことである。

共同装備

名称	必要数	在庫数	不足数	名称	必要数	在庫数	不足数
テント(6人用)	1	1	0	石油	30ℓ	0	30ℓ
ツェルト	1	1	0	マッチ	100	0	100
ハンモック	6	0	6	トランジスタ	1	0	1
ナベ	2	2	0	薬品一式			
コップ	1	1	0	シユラフ	6	6	0
食器(大)	20	20	0	ロープ			
〃(小)	20	20	0	カメラ	6	4	2
ハシ	20	20	0	フィルム	30本	0	30
包丁	10	3	7	テフロンダ	1	0	1
ポリタン	4	4	0	テフロン3号	20	0	20
フライパン	1	1	0	トランジスタ	2		
ヤカン	1	1	0	電池 単1	40	0	40
シャモジ	3	3	0	電池 単3	80	0	80
オタマ	2	2	0	フィルム	60	0	60
魚焼網	2	2	0	モノ170			
タワシ	4	4	0	〃カラー	20	0	20
クレソラン	10	0	10	ヘッドランプ	10	6	4
布バケツ	3	0	3	大工道具一式			
ナタ	6	0	6	目覚時計	1	1	0
ラジウス	3	3	0	シャベル	2	2	0
ビニルシート	6	6	0	釣道具一式			
メタ	4	0	4	エアマット			
カビョウ				糸田びき			
				輪ゴム			
				ローソク			

学 術 装 備

名 称	必要数	在庫数	不足数	名 称	必要数	在庫数	不足数
補虫網	6	1	5	根ホリ	2	0	2
柄	3	0	3	胴乱	1	1	0
三角管	3	1	2	野冊	2	2	0
採集箱	1	1	0	接写装置	1	0	1
採集バット	1	0	1	団 金鑑			
毒ツボ	2	0	2	双眼鏡	1	0	1
毒ビン	10	0	10	温度計	2	0	2
クダビン	70	0	70	クリノーター	1	1	0
虫ビン	4	0	4	巻尺	2	0	2
アセチレン燈	1	0	1	折尺	2	0	2
白布	1	0	1	ハカリ	1	0	1
黒紙	2	0	2	コンパス	2	0	2
ピペット <small>大小</small>	2	0	2	ラベル	200	0	200
ルーペ	3	0	3	方眼紙	20	0	20
トラップ	110	10	100	ホリピン <small>大小</small>	20	0	20
解剖用具	2	0	2	野帳	3	0	3
脱脂綿	3	0	3	ボールペン	6	0	6
バット <small>大小</small>	1	0	1	日付印	1	0	1
ホリ袋 <small>大小</small>	300 200	0	300 200	マジック	10	0	10
ホルマリン	1000cc	0	1000cc	ビニールテープ	10	0	10
エーテル	500cc	0	500cc	ナフタリン	5	0	5
酢酸	500cc	0	500cc				
パラジクロロ ベンゼン	500cc	0	500cc				
カーバイト	5kg	0	5kg				

個人装備

名称	必要数	名称	必要数
キスリング	1	ゲートル	1
サブサック	1	洗面用具	一式
キャラバン シューズ	1	ジャンパー	1
長グツ	1	海水パンツ	1
サンダル	2	千利ガミ	
シュラフ	1	マッフ	
ポンチョ	1	個人薬品	一式
磁石	1	サングラス	1
ホイッスル	1	タカロ <small>日本語</small> 会話書	1
軍手	4	英会話	1
靴下	4	パスポート	
上着			
下着			
帽子	2		

行動日程

- 6月17日 先発隊横濱発 (本隊(大場所)発)
- 23 先発隊 Manila着 決行
- 24 本隊 Manila着
- 28 本隊 Manila着 先発隊と合流 渉外(日本大使館)
- 7月1日 スリピン工學部, マニラ商会)
- 2 調査出発準備
- 3
- 4
- 5 Manila発 Puerto R.着 渉外(移民局, 警察, ホ
トリンテ-学園, PQM:パワカ水銀会社)
- 6 Tagburos着
- 7
- 8 渉外 出発準備
- 9
- 10 Babuyan 向 出発
- 12 Babuyan R. 壱行
- 15 Tagburosへ引きかえす 後発隊横濱発
- 16 部落入り
- 21 後発隊 Manila着
- 22 後発隊 Tagburos着
- 24 後発隊 本隊と合流
- 8月6日 調査終了
- 8日 Tagburos着
- 9 帰国準備
- 10
- 11 Puerto P. 発
- 13 Manila着
- 22 この日までに Manila 発
- 28 日本着

Manila連絡先 Marsman & Company Incorporated: Buendia Ave.
Makati, Rizal, P.I. Manila.

Davao連絡先 Jonny Ortiga: 111 Magsaysay Ave. Davao.

Palawan島連絡先 PQM; Tagburos, Palawan.

経費

1. 支出の部

渡航費	日本 → Davao	$7,000^{\text{円}} \times 4^{\text{名}}$	28,000
	横浜 → Manila	$32,000 \times 2$	64,000
	Davao → Manila	$6,000 \times 4$	24,000
	Manila ⇄ Puerto P.	$8,000 \times 6$	48,000
	Manila → 日本	$32,000 \times 6$	192,000
荷物運送費			10,000
滞在費	Davao	$1,000^{\text{円}} \times 6^{\text{日}} \times 4^{\text{名}}$	24,000
	Manila	$1,000 \times 6 \times 5^{\text{日}}$	30,000
	"	$1,000 \times 7 \times 1$	7,000
	Puerto P.	$500 \times 6 \times 5$	15,000
	"	$500 \times 4 \times 6$	12,000
	Manila	$1,000 \times 12 \times 2$	24,000
	"	$1,000 \times 3 \times 1$	3,000
調査費			
食費		$400 \times 31 \times 5$	62,000
		$400 \times 16 \times 1$	6,400
交通費			10,000
通訳人権費		$1,000 \times 31 \times 1$	31,000
ポーター代		$500 \times 4 \times 5$	10,000
渡航手続費		$1,500 \times 6^{\text{名}}$	9,000
準備費			10,000
装備費			100,000
予備費			54,000
			<hr/>
合計			¥809,400

2. 収入の部

個人負担	$50,000^{\text{円}} \times 6^{\text{名}}$	300,000
部員援助		20,000
部費及び学外援助		100,000
O.B.会援助		20,000
カンパ		30,000
進交会援助		30,000
		<hr/>
合計		¥809,400

隊 組 織 連 絡 先

菅田 弦 隊長 庶務 記録
文理学部3年 民族 探検部部長 23
東京都日野市多摩平団地 81の301

合田 濤 副隊長 渉外 技術
商学部2年 民族 探検部部員 19
神奈川県川崎市 中幸町 3の26 737号

松本芽樹 装 備
商学部4年 経 済 探検部部員 21
横浜市南区上大岡町 323尾沢方

出羽 寛 医 療 学 術
文理学部2年 生 物 同 部員 20
横浜市金沢区六浦町 4546 竹中方

折井亮夫 食 糧 技 術
文理学部2年 生 物 同 部員 20
横浜市金沢区六浦町 4546 竹中方

小林 憲二 会 計 学 術
文理学部2年 地 理 同 部員 19
横浜市西区元久保町 76小林方

沖繩

太平洋

台湾

ホノコン

南シナ海

ルソン島

フィリピン

シロ島

カンボジア

サイゴン

パラワン島

フエルト

アリンロタ

ミンダオ島

ババオ

スル

ボルネオ

諸島

ハルマエラ

ボルネオ

ネ

オ

セレベス

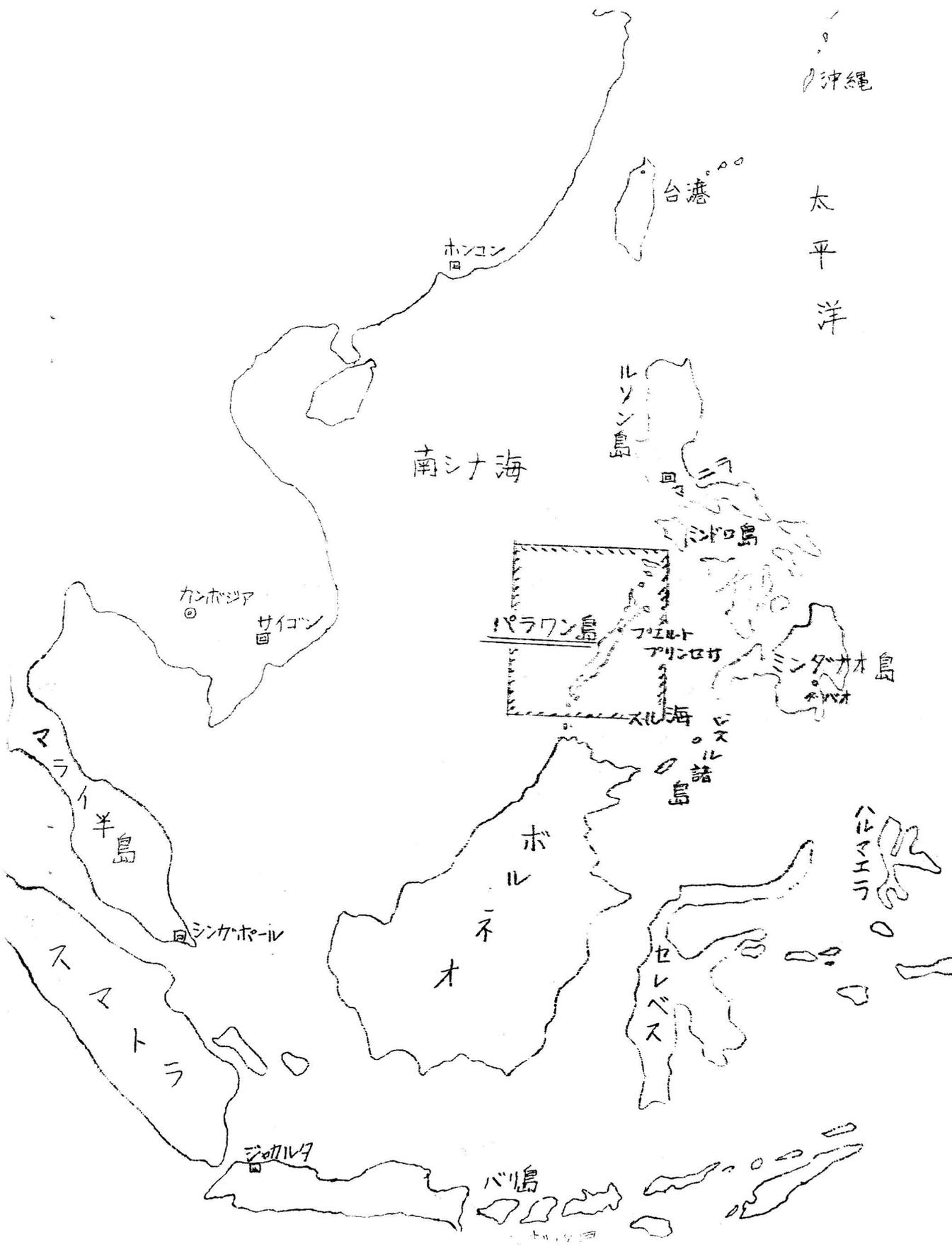
マライト半島

シンガポール

スマトラ

ジャカルタ

バリ島



パラワン島中部

